

「人生の達人」

ためだ もりひさ
為田 守久さん(75)

昭和23年、山寺町で生まれ、育つ。教職の道を志し、大学卒業後、中学校の理科教諭として教壇に立つ。主に島原半島の中学校を中心に勤務し、40代半ばで赴任した島原市教育委員会体育課では、雲仙・普賢岳噴火災害後の復興に向けた全国・九州大会規模のスポーツ大会の誘致や運営に奔走。第三中学校校長で定年退職を迎える。

在職中に始めた弓道、特に日置流の師範として弓道の修練、研究に情熱を注ぎ、世界伝統弓術大会(6回出場)では日本チームのメンバーとして2回の優勝に貢献。島原半島のALT(外国語指導助手)への弓道指導にも携わり、日本の伝統文化を通じた国際交流にも取り組む。全日本弓道連盟錬士六段、日置流雪荷派師範。山寺町在住。



温故知新 — 古きをたずねて新しきを知る —

「生涯弓引き」弓道人生の始まり

豊かな緑に囲まれた焼山園地。隣接する山林に開かれた野趣あふれる矢場で一心に弓を引く姿があります。「ここには週に二、三回は練習に来ます。もともとは家のたき木用の山だつたのですが14年前に江戸時代様式の稽古場として開きました。この一帯は雑木林になっていて、いろんな種類の鳥がやってきます。静かな森の中に小鳥のさえずりが聞こえて心が落ち着きますよ。」と、穏やかな笑顔で語るのは為田守久さんです。

「父親が弓引きだったので、幼い頃から弓道には親しんでいましたが、本格的に始めたのは三十代半ばから。赴任した西有家中学校の敷地に町の弓道場があったのをきっかけに、幼い頃に父から受けた手ほどきを思い出し、やろうという気持ちが始まりました。さっそく高校時代の先輩に相談して初心者教室に通い始め、西有家中学校に在職中、約2年半で五段まで取得することができました。」と、振り返ります。その後も修練を重ね、70歳を前に父親と同じ六段を取得されたそうです。



毎週2回ALT(外国語指導助手)へ指導を行い交流を深めています。



雲仙市千々石町で開催された「観櫻火宴」に甲冑姿で参加(H18)(写真:右が為田さん)

島原に伝わる「大和流弓道」

第5代島原藩主として島原に入封した松平忠房公は、武芸の振興を図るため弓道の流派の一つである大和流弓道の開祖森川香山を藩の弓術師範として京都から招き、広く普及しました。

「大和流は弓術の流派の一つですが、現代弓道とは違い、江戸時代から伝わる実戦向けの弓道です。島原藩に伝わった大和流弓道について記され、長年保存されていた「川鍋家文書」は大変貴重なもので、松平文庫(島原図書館内)への寄贈にも関わらせていただきました。膨大な量でしたが目録も作成し、松平文庫に収蔵できたことはとてもうれしく思っています。」と、語ります。

「実際に行われていた江戸時代の弓術を知るため、古文書を調べ、そこに書かれていることは全て実践するようにしています。弓具工作(弓・矢の製作や修理)の技術についても京都や兵庫、福岡などの工房を訪ねて学びました。先人たちがどのように弓と向き合い、実戦での技術を高めた現在の形となったのか。川鍋家文書にはあらゆる資料が残っています。それらをひもとき、当時のことを研究することは奥深く、とても面白いと感じています。」

今後の目標をお聞きすると「時間はかかると思いますが、誰もが読むことができる大和流弓道の現代語版テキストを完成させたいですね。」と、弓道への尽きない情熱と探求心を語っていただきました。

